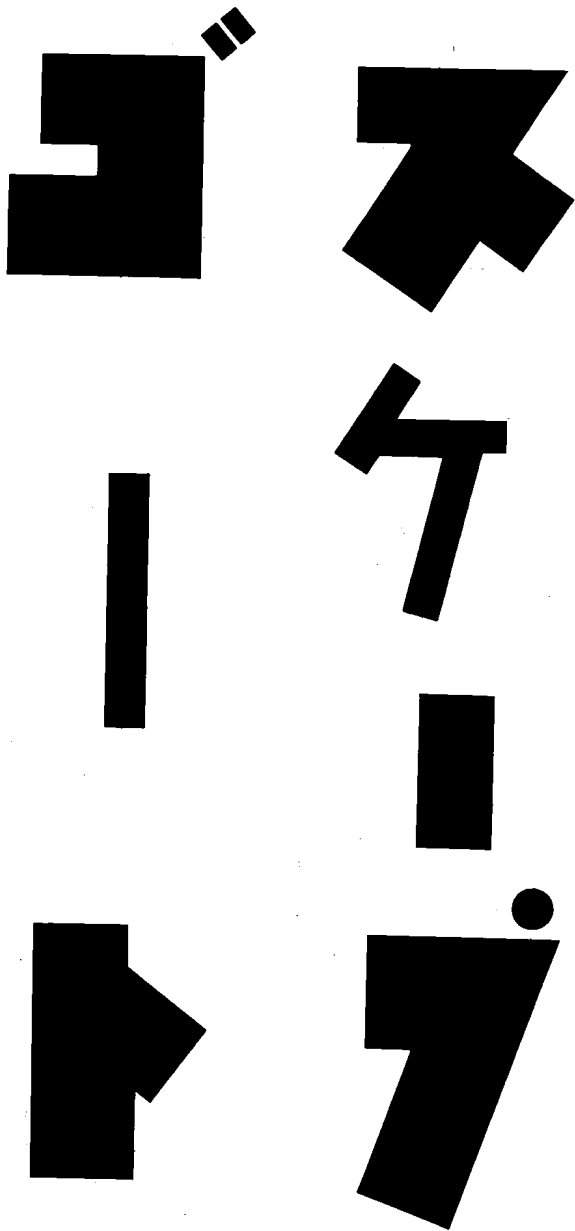


後藤明生

日本文芸社





後藤明生

日本文芸社

© 1990 Meisei Goto
Printed in Japan



後藤明生

スケープゴート

*

1990年7月25日第一刷印刷
1990年8月1日第一刷発行

発行者 兵頭武郎

発行所 株式会社 日本文芸社 〒101 東京都千代田区神田神保町 1-8

電話 東京(03)294-8931 振替 東京8-73081

本文印刷所 図書印刷

カバー・表紙・扉印刷所 栗田印刷

製本所 大口製本

定価 1400 円 (本体1350円)

ISBN 4-537-04906-0 C 0093

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

著者略歴

後藤明生 くごとう・めいせい 1932年、朝鮮咸鏡南道永興郡永興邑に生まれる。本名・明正。元山中学入学の年に敗戦。46年、引揚げ、本籍地の福岡県立朝倉中学に転入、同高校を経て、57年、早大露文科を卒業。79～80年、早稲田大学文学部文芸学科講師(非常勤)、89年～、近畿大学文芸学部教授。55年、「赤と黒の記憶」が「文藝」主催の第4回全国学生小説コンクールに入選、62年、「関係」が文藝賞佳作、67年、「人間の病氣」が芥川賞候補となる。著書として小説に『私的生活』(新潮社、69年)『笑い地獄』(文藝春秋、同)『何?』(新潮社、70年)『書かれない報告』(河出書房新社、71年)『関係』(皆美社、同)『疑問符で終る話』(河出書房新社、73年)『四十歳のオブローモフ』(文藝春秋、同)『挟み撃ち』(河出書房新社、同)『思い川』(講談社、75年)『めぐり逢い』(集英社、76年)『夢かたり』(第5回平林たい子文学賞、中央公論社、同)『笑坂』(筑摩書房、77年)『行き帰り』(中央公論社、同)『夢と夢の間』(集英社、78年)『虎島』(実業之日本社、同)『嘘のような日常』(平凡社、79年)『八月／愚者の時間』(作品社、80年)『吉野大夫』(第17回谷崎潤一郎賞、平凡社、81年)『汝の隣人』(河出書房新社、83年)『謎の手紙をめぐる数通の手紙』(集英社、84年)『壁の中』(中央公論社、86年)『使者連作』(集英社、同)『蜂アカデミーへの報告』(新潮社、同)『首塚の上のアドバルーン』(芸術選奨文部大臣賞、講談社、89年)などが、エッセイに『円と楕円の世界』(河出書房新社、72年)『ロンアの旅』(北洋社、73年)『分別ざかりの無分別』(立風書房、74年)『雨月物語紀行』(平凡社、75年)『眠り男の目』(インタナル出版、同)『不思議な手招き』(集英社、同)『夜更けの散歩』(集英社、77年)『酒 猫 人間』(立風書房、78年)『見える世界、見えない世界』(集英社、81年)『笑いの方法——あるいはエコライ・ゴロリ』(第1回池田健太郎賞、中央公論社、同)『女性のための文章教室』(中央公論社、82年)『小説——いかに読み、いかに書くか』(講談社、83年)『復習の時代』(福武書店、同)『おもちゃの知、知、知』(冬樹社、84年)『対話』はいつ、どこでも』(斎藤忍随との対話共著、朝日出版社、同)『自分のための文章術』(三省堂、85年)『ドストエフスキーのペテルブルグ』(三省堂、87年)『文学が変るとき』(筑摩書房、同)『カフカの迷宮——悪夢の方法』(岩波書店、同)『メメント・モリ——私の食道手術体験』(中央公論社、90年)など多数がある。

小説から 遠く離れて

蓮實重彦

村上春樹, 井上ひさし, 丸谷
才一, 村上龍, 大江健三郎,
中上健次などの代表作を徹
底的に分析しつつ, 小説の
擁護へと至る批評の冒険。

四六判 定価1300円(税込)

——日本文芸社——

スケープ
ゴート

目次

サイギサイギ

7

変形

27

子供地蔵

53

スケープゴート

87

ジャムの空壕

109

XYZへの手紙

135

禁煙問答

177

後記

200

装
幀
平
野
甲
賀

scapegoat

サイギ
サイギ
サイギ
サイギ

リングのお礼状を書いて出したすぐあと、おハガキ届きました。そして、「紅玉」を「光玉」と書き間違えたことに気がつきました。手紙を書きながら、どうもヘンだな、と思ったことも思い出しました。漢字というやつは、なるほど不思議なものです。

あの礼状も、何となくヘンだなと思いながら、不精をしてそのまま出したのですが、文字書き商売のぼくがこんなことをいうと、またまたあなたを失望、幻滅させることになるのかも知れません。忘れたかも知れませんが、あなたはぼくにこんなことをたずねました。そう、あのマイクロバス旅行（？）の途中です。小説家という人は、こうやって窓から眺めた山や川や海を全部ちゃんと頭に入れて帰るのですか？

もちろんぼくは、即座に否定しましたが、それをいまふっと思い出したわけです。「またまた」といったのはそういう意味です。それともあの質問、津軽流の冗談諧謔だったの

かな？ なにしる津軽は、諧謔の名手、道化の華、太宰治のお国ですからね！ あるいはぼくは、くそ真面目な顔でたずねたあなたの、津軽流冗談諧謔に、まんまと引っかっただけなのかも知れない。いや、どうもそんな気がして来ました。

しかしまあ、それも大いに結構でしょう。なにしろ三十六年ぶりの再会だったのですから。北朝鮮で、戦争に負けたとき、あなたは元山^{げんざん}高女二年生、ぼくは元山中学一年生。翌年引揚げて来て、あなたは叔父さんと一緒に本籍地の津軽へ。ぼくらはおふくろと一緒に、死んだおやじの本籍地筑前へ。そしてそれから三十六年が経って、ぼくはいまや、四十九歳というわけなんですから！

もちろんあなたは、ぼくのおやじの顔はおぼえてくれていてでしょうが、そのおやじが、引揚げの途中、安辺^{あんべん}の花山里^{かざんり}で血を吐いて死んだのが、四十七歳です。しかし、いや、わかってます、わかってます。もうこの話は止めにしましょう。花山里のことはすでにずいぶん書いたし、あなたも読んでくれていたことは、電話で前からわかっていました。そういえば、この三十六年間に、電話では何度か話しましたね。いまアメリカに社用で出張中という息子さんが、東京の大学に来ていた頃じゃあなかったかな？ また、下の娘さんが、折角合格した地元の国立大学を棒に振って、東京の看護学校へ出て行ってしまったと、あ

あなたが電話で嘆いていたのを思い出します。

しかし、それがあるとき五所川原のホテルから叔父さんの家まで車を運転してくれた、あの娘さんでしょう？ 東京で学校を出ながら、ちゃんと親元へ戻って、地元の国立病院に勤めるとは、実に実に、近來稀な親孝行娘ではありませんか。いや、それとも、待てよ、あのとき（もう何年前だろうか？）の電話口の嘆きも、何かな、やはり津輕流の冗談諧謔だったのかな？ いや、それとも、あれはそうではなかったのかな？

ただ実は、あの電話のときの話、あとでこっそり何かに書いた（これもあるいは読まれたかな？）のですが、正直いって、電話ではあなたのズーズー弁（これはマズイですか、マズければ勘弁して下さい！）におどろいたのです。叔父さんのズーズー弁は、これにも永興時代から有名でした。

曰く「魚の骨にはカルスウム分が含まれているんだよ」

曰く「リンゴの皮にはビタミンCが含まれているんだよ」

しかし、ぼくたち子供は、いわゆる植民地標準語（叔父さん流に言えばヒョーズン語か？）でしたから、電話口のあなたのズーズー弁におどろいたわけです。そしてあなたの顔を、ぼんやり思い出そうとしていたようです。そうです、ぼく達が永興で植民地ヒョー

ズン語を話していた時分のあなたの顔です。福岡のおふくろのところに一枚ある黄色くなった写真も見ました。そう、そう、こないだ叔父さんのところで見た、あれです。専売局長官舎（それにしても、あの官舎は実にハイカラな洋館建てだったな）の玄関前で、あなたの家族と一緒に撮った、あの写真です。ぼくは、半ズボンにおもちゃのサーベルをさげています。たぶん、小学校一年のときじゃあないだろうか？

うちのばあさんも写っています。その隣が、亡くなった叔母さんじゃなかったかな？

その隣が英三君のおふくろさん（うちのばあさんの妹）でしょう。うちの兄貴とすぐ下の弟も写っています。確かあれは夏休みでしょう。内地の中学に行っていた英三君の兄さん（シモフリの中学生服）が写っているのは、夏休みで帰って来ていたのだと思います。ポブラの木に囲まれた広い庭で、山羊が二匹いたでしょう。ぼく達はそのあたりで兵隊ゴッコをやっていたところを、写真を撮るというので玄関前に集められたのだと思います。これは、不思議にはつきりおぼえています。ぼくがいかに面白くなさそうな顔で突立っているのは、しぶしぶ集められたからです。

もちろん、あなたもオカッパ頭で写っています。ぼくが小学一年なら、あなたは二年ということですが、それ以後のあなたの写真は一枚も見えていません。もっとも、植民地ヒョ